頬部脂肪腫の2例

高野 伸夫*・松井 隆*・小鹿 典雄*
斎藤 力*・田代 教平*・酒井 康友**

Two cases of lipoma in the buccal region

Nobuo TAKANO*・Takashi MATSUI*・Norio KOSHIKA*
Chikara SAITO*・Kyohei TASHIRO*・Yasutomo SAKAI**

まえがき

脂肪腫は非上皮性の良性腫瘍で、脂肪組織の存在するすべての部位に発生するといわれているが^{1,2)}、口腔領域における本腫瘍の発生は比較的まれのようなのである³⁻⁶⁾。最近わたしたちは頬粘膜下に発生した比較的大きな脂肪腫を引き続き2例経験し、口腔内より、これを摘出後 raw-surface に自家頬粘膜の遊離全層移植を行って、良好な結果を得たので報告する。

症 例

症例1： 63歳 女性。

初 診：昭和51年5月。

主 訴：左側頬部腫脹。

一般既往歴および家族歴：特記すべき事項はない。

現病歴：約1年前、下顎に局部床義歯を装着し、それより約3ヵ月経過したころ、左側頬粘膜部の腫脹に気づいた。その後腫脹は漸次増大したが、不快症状がなく、また悪性腫瘍と診断されるのを恐れて、医師を訪れることなく経過していた。しかし最近に至って口腔外にも腫脹がみられるようになったため、某歯科医を訪れ、紹介され来院した。

現 症

全身所見：体格中等度、栄養状態良好、顔色も良好で特記すべき事項は認められなかった。臨床諸検査では、ワッセルマン反応が陽性である以外、特に異常はみられ

図1 症例1の術前写真

なかった。

局所所見：左側下頬部に軽度の腫脹を認めたが、表面の皮膚は正常色を呈していた。オトガイ下および顎下リンパ節にも異常は認められなかった。口腔内所見としては、左側下顎犬歯部から大臼歯部にわたる下頬部に鶏卵大の比較的境界の明瞭な腫瘍が認められた。腫瘍表面は滑沢で、周囲粘膜よりもやや淡黄色を呈し、硬度は弾性軟で可動性であった(図1)。

X線所見：腫瘍付近の顎骨には特記すべき所見は認められなかった。

臨床診断：脂肪腫。

処置および経過：試験的穿刺を行い内容液のないことを確かめた上で生検を行い、脂肪腫との診断を得た。摘出手術は局所麻酔のもとに腫瘍周囲の粘膜に切開を加え、鈍的剥離を行って腫瘍を一塊として摘出した。手術後の創面は一次閉鎖が不可能であったので、反対側頬粘膜より長径3cm、短径2cmの紡錘形の粘膜片を採取し、粘膜欠損部にこれを移植した。移植片の固定にはスポンジによる tie-over を行い、術後10日目に除去した。術後経過は良好で移植された粘膜は完全に生着し、8ヵ月を経過した現在再発傾向は全く認められない(図2)。

摘出物所見

肉眼所見：摘出物の表面は滑沢で、薄い被膜で被覆さ

* 東京歯科大学口腔外科学教室第2講座(主任：高橋庄二郎教授)

** 東京歯科大学病理学教室第2講座(主任：山村武夫教授)

* Second Department of Oral Surgery, Tokyo Dental College (Chief: Prof. Shojiro Takahashi)

** Second Department of Pathology, Tokyo Dental College (Chief: Prof. Takeo Yamamura)

受付日：昭和52年4月28日

図 2 症例 1 の術後 8 カ月目の口腔内写真
(反対側頬粘膜移植)

図 3 症例 1 の摘出物

図 4 症例 1 の摘出物断面

れており、淡黄色を呈していた。大きさは $38\text{mm} \times 32\text{mm} \times 28\text{mm}$ 、重さ 15g 、硬度は弾性軟であった(図 3)。断面は黄色の脂肪様組織で満たされており、分葉状を呈していた(図 4)。

病理組織学的所見：Haematoxylin-Eosin 染色を行い鏡検した。粘膜下結合組織には周囲と境界明瞭な脂肪組織が認められ、脂肪組織は線維性結合組織によって分葉状を呈していた(図 5)。脂肪細胞は大小不同であり、

図 5 症例 1 の組織像 (H.E. 染色 $\times 30$)

図 6 症例 1 の組織像 (H.E. 染色 $\times 120$)

また脂肪芽細胞もみられ、細胞質には脂肪顆粒が認められた。異型性は認められなかった(図 6)。

症例 2：78 歳 女性。

初 診：昭和 51 年 6 月。

主 訴：右側頬粘膜部腫脹。

一般既往歴：1 年ほど前、内科医を受診し心筋障害を指摘された。また昭和 51 年 4 月には気管支炎に罹患したとのことである。

家族歴：特記すべき事項はない。

現病歴：7～8 年前、下顎局部床義歯を装着した。数

図7 症例2の術前写真

図8 症例2の術中写真

図9 症例2の術中写真
(摘出物付着頬粘膜移植)

図10 症例2の術後6ヵ月目の口腔内写真

年経過時より頬粘膜部の腫脹を自覚したが、不快症状がないため放置していた。しかし最近義歯の不適合が著明となったので某歯科医を受診し、紹介され来院した。

現 症

全身所見：体格中等度，栄養状態良好で，特記すべき事項は認められず，一般血液検査，尿検査においても異常はみられなかった。

局所所見：右側頬部に腫脹を認めたが，同部皮膚は正常色を呈していた。オトガイ下および顎下リンパ節には異常はみられなかった。口腔内では右側下顎小臼歯部から最後臼歯部にわたる頬粘膜部に小鶏卵大の境界の比較的明瞭な可動性腫瘍が認められた。その表面は滑沢で，周囲粘膜よりやや赤色を呈し，硬度は弾性軟であった(図7)。

X線所見：腫瘍付近の骨には特記すべき所見は認められなかった。

臨床診断：脂肪腫。

処置および経過：試験的穿刺を行ったが，内容液はみられなかった。生検の結果脂肪腫との診断を得たので，全身麻酔下に摘出手術を行った。手術は腫瘍周囲に紡錘状の粘膜切開を加えて鈍的剥離を行い(図8)，腫瘍を一塊として摘出した。腫瘍摘出後の創面には摘出物に付着して切除された頬粘膜を口腔外において剥離しこれを移植した(図9)。移植片の固定には，tie-overを用いた。術後の経過は良好で移植された粘膜は生着し，術後6ヵ月を経過した現在再発傾向は全く認められない(図10)。

摘出物所見

肉眼所見：摘出物の表面は滑沢で黄色を呈していた。

大きさは 32mm×28mm×25mm, 重さ 9.1 g, 硬度は弾性軟であった(図11). 断面は充実性で, 黄色を呈し脂肪様組織であった.

病理組織学的所見: Haematoxylin-Eosin 染色を行い鏡検した. 大小不同の脂肪細胞がみられ, 核は辺縁に圧扁され, わずかに間質が認められた. 異型性は認められなかった(図12).

考 察

口腔領域に脂肪腫の発生することは比較的まれであるため, 口腔領域における脂肪腫の多数例についての臨床統計は, ほとんどみられない. 最近関田ら⁷⁾は, 1966年から1975年に至る10年間に於ける本邦報告例26例の統計的観察を試みている. また Cannell ら⁸⁾は, 最近10年間のロンドン病院における口腔脂肪腫24例についての臨床統計を報告している. これら両報告を比較してみると

性別に関しては関田らは男性9例, 女性17例で女性に男性の約2倍の発生率を示しているが, Cannell らの報告では男性13例, 女性11例で, ほとんど性差を認めていない. 年齢的にはいずれも50歳代ないし60歳代にピークを示している(図13). 発生部位としては, いずれの報告も頬部が最も多く, 全例の約30%を示し, 次に多いとみられる部位は口腔底である(図14).

最近10年間にわたしたちの教室で経験した脂肪腫は6例で, 今回報告した2症例のほか, 顎下部2例(ともに男性, 年齢は34歳と41歳), 前頭部および側頭部各1例(男性21歳および女性25歳)であった.

図 11 症例2の摘出物

図 12 症例2の組織像 (H.E. 染色×120)

図 13 口腔脂肪腫の年齢別性別発生頻度

図 14 口腔脂肪腫の部位別発生頻度

脂肪腫の組織発生としては組織異所発生説と過形成による腫瘍の2説があり、成因としては、先天的内因、内分泌の失調、神経ないし末梢神経および結核との関係、持続的刺激などがあげられている⁹⁾。今回わたしたちの報告した2症例はいずれも義歯装着後に発生したことから義歯による持続的刺激が本腫瘍の発生になんらかの関係があるのではないかと想像された。

あ と が き

わたしたちは頰粘膜下に発生した比較的大きな脂肪腫の2例を経験した。症例1は63歳女性で大きさは鶏卵大、症例2は78歳女性で大きさは小鶏卵大であった。腫瘍摘出後の raw-surface に自家頰粘膜の遊離全層移植を行い良好な結果を得た。

稿を終わるにあたり終始御指導、御校閲を賜った高橋庄二郎教授ならびに山村武夫教授に深く謝意を表します。

本論文の要旨は第106回日本口腔外科学会関東地方会(昭和51年12月11日)において発表した。

文 献

- 1) Gorlin, R.J., Goldman, H.M.: Thoma's Oral pathology 2. ed 6, Mosby Co, St Louis, 1970, p 880.
- 2) Macgregor, A. B.: Sublingual "Ranula" Dermoid cyst, and Lipoma. Oral Surg 12: 334 1959.
- 3) Geschickter, C.F.: Lipoid tumors. Amer J Cancer 21: 617 1934.
- 4) Simpson, H.E.: Lipoma of oral cavity. Oral Surg 12: 349 1959.
- 5) 朱雀直道, 他: 頰粘膜下に発生した脂肪腫の2症例. 口科誌 16: 499 1967.
- 6) 久野吉雄, 他: 歯肉に発生した脂肪腫の1例. 日口外誌 19: 651 1973.
- 7) 関田俊介, 他: 脂肪腫の2例. 鶴見歯学 2: 69 1976.
- 8) Cannell, H., et al.: Lipomata in oral tissues. J Maxillofac Surg 4: 116 1976.
- 9) 田中 順: 頰粘膜に生じた線維性脂肪腫の1例. 口病誌 28: 251 1961.